

令和7年度 旧今治管内生徒指導夏季研修会 実施報告書

1 日 時 令和7年8月1日(金) 10:20~12:00

2 場 所 今治市中央公民館 大ホール

3 講演内容

- ・ 演 題 「問題行動のヒントとこたえ」
- ・ 講 師 愛媛大学教育学部 教授 信原 孝司 氏

(1) 児童生徒の様々な問題行動の理解

ア 不登校

(ア) 不登校の理由の中で、「病気や経済的理由」の特に病気の部分の定義が曖昧で、判断が難しい。実際に元気はつらつの不登校児童生徒はあまり見たことがない。

(イ) 不登校児童生徒数は増加傾向にあり、2024年10月に公表された「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」では、3.72%であった。特に近年急増しており、コロナ禍に家族で過ごす時間が増加したことが一因かもしれない。また、愛媛県は、理由別長期欠席者数の不登校は四国で最も多い。人口が多いことが影響している。また、病気による欠席も最も多いため、医療機関との連携も考えていかなければならない。

(ウ) 不登校には発達障がい、いじめ、虐待や家庭環境が背景にある場合がある。発達障がいがある場合では、教員側から言い出しにくく、保護者が認めたくないこともあり、大人になってから苦労する場合がある。いじめが背景にある場合では、近年SNSが普及し、活用している子供が多くなっているが、SNS上でのいじめが急増している。SNS上でのいじめは、関わっている人数が多いため、対応が難しくなっている。虐待や家庭環境が背景にある場合では、虐待やヤングケアラーは家庭内の問題であるため表面化し難い。特に虐待の場合は、子供自身が悪いと思込み、親に好かれようと行動し、離れられず自立できない(トラウマティックボンド)状況に陥りやすい。

(エ) 不登校児童生徒は学校へ行くという当たり前のことができないストレスを抱えていたり、周りからの見られ方を気にしたりしているため、どのような方法で周囲との関係をつなぐか、関係を築いていくかが重要である。出席日数の変化だけにこだわらず、臨床心理学者の河合隼雄氏の「思春期はさなぎの時代」や昔話の「三年寝太郎」のように見えない部分の成長に焦点を当てていくことが大切である。こういった成長が保護者の安心や本人の安定につながり、家庭での居心地が良くなったり、次に進むきっかけとなったりする可能性がある。

イ いじめ

(ア) これまで、いじめを苦に自ら命を絶つという事件から、国がいじめの定義を見直したり、スクールカウンセラーを学校に配置したりと、様々な対策を講じてきた。現在、愛媛県はいじめの認知件数が全国で二番目に少なく、見落としがないか注意が必要である。

(イ) 各校でいじめアンケートを実施していると思うが、現在の大学生に当時のことを聞くと、書かなかった・書けなかったという意見が多かった。実施方法について改善の余地があると思われる。その中で、安全の確保、孤立感の解消、そして大人の責任ある保障の言葉とそれらの実行が大切であり、最も重要なことである。

(2) 児童生徒のこころの成長を理解するヒント

ア 問題行動と育みの視点

今回のテーマ「問題行動のヒントとこたえ」の「こたえ」はあえてひらがな表記にしている。それは、様々な問題行動にははっきりとした答えがないことが多いが、「答え」が分からなくとも、「応え」る過程にこそ意味があるからである。また、諦めがある放任ではなく、その子供の可能性を信じて見守る姿勢を大事に、相手のことを信じている自分を信じてほしい。

イ こころの発達(五つのテーマ)

アイデンティティの確立は大切だが、望みの部分が重要であると考え。他の部分に目が行きがちだが、大人も子供も一番下の望みの部分が満たされれば、より良い人生を歩むきっかけになる。

(3) 保護者支援の考え方

ア 保護者支援

保護者を支援することが子供の成長に役立つ。子供と保護者を同一視し、子供の言動を保護者の責任にせず、子供の肯定的な変化を確認し、保護者を評価することが必要である。また、学校に対してけんか腰や高圧的な態度で接する保護者もいるが、これは自身が子供時代に学校に対する不満を抱えていたり、保護者自身の家庭環境の影響があったりする。保護者の背景まで汲み取ることで理解と対応のヒントを見付けることにつながる。

イ 困難事例への対応

非常識な要求を繰り返す保護者など、対応が困難な事例があるが、まずは傾聴し、相手の意図を理解することが重要である。その後、事実を確認していくが、話を聞く中で、曖昧な返答や相手の考えを否定すること、相手の意見に迎合することは、してはいけない。また、こちらに非がある場合は率直に謝罪する。内容によっては誠実で毅然とした態度で、「できないことはできない」と伝えることが必要である。

(4) 対話の在り方の工夫

ア 褒め方と叱り方のヒント

- (ア) 日本人は他国と比べ、自己肯定感が低い。できない体験や分からない経験が積み重なることで自信を失っている。小さな成功体験の積み重ねが成長につながる。
- (イ) 具体的に褒め、伝えることが大切である。そのためには丁寧に子供を見ていくことが求められる。
- (ウ) 最近の子供たちは叱られ慣れていないが、叱ることは必要である。平尾誠二さんの『人を叱る時の四つの心得』も参考に指導してほしい。

イ 話の聴き方のヒント

相手の言葉を待つこと、相談者が自力で解決できるよう導くこと、適度にうなずき、目を合わせること、矛盾の多い話からヒントを得ること、共感することなどが必要である。しかし、聴きすぎることは相手の不安や心配を増大させることもあるため、適度に話を区切って、次回につなげることも大事である。

(5) 質疑応答

- Q 1 困難事例の中で、記録を取ることの大切さを教えていただいたが、効果的な記録の取り方ややり方があれば教えてほしい。
- A 1 事実としてあったこととそれに対するこちらの気持ちを記録しておくことよい。更に、指導時に感じた疑問点も残しておくこと、後で気付くことがあり、その後の指導等に生かされる。
- Q 2 いじめアンケートに現状を素直に書くことができない児童生徒に対して、有効な手立てや工夫にはどのようなことがあるか。
- A 2 2択の選択式のアンケートを実施し、全校生徒を対象に教育相談を実施する。こういった方法があるが、書いたときにいじめがエスカレートするかもしれない、無記名でも教員側で記入者が分かるように回収している、筆跡から分かるなど、不安に思う児童生徒がいる。「先生に知られたくない」「そんな子だと思われたくない」などと子供が思うことなく、不安を和らげることが大切であり、そういった行いが学校への信頼感を高めることにつながる。
- Q 3 注意に対して過剰に反応する児童に対して、どのように指導に当たればよいか。
- A 3 声掛けで暴れたり、エスカレートしたりする子供は、被害者意識をもってしまい、過剰に反応してしまうことがある。時間をおいて落ち着いてから話すようにすれば、理解しやすくなる。
- Q 4 こころの発達（五つのテーマ）の望みへの有効なアプローチの仕方があれば教えてほしい。
- A 4 褒められたり、認められたりする中で感じられる、「大切にされる経験」が最も大切である。大人や教員も同じで、こころの発達（五つのテーマ）の自発や自立ばかり求められるとしんどくなってしまう。また、いじめはこの望みの部分を破壊してしまう。そこを理解して、しっかりと手当をしていくことが必要である。

(6) 感想（講演会終了後のアンケートより一部抜粋）

- ア 見逃しているいじめがないか、振り返る必要がある。家庭環境はこちらではなかなか変えることはできないが、子供を認め、受け入れていきたい。
- イ 子供の背景や保護者自身の特性に目を向けて対応していかないと子供の問題行動が保護者との対立になりかねない。共感しながらもしっかりと対応できるように話を聴いていきたい。